

小高志

No.3

小高地域構想ワーキンググループ
(小高区地域協議会)

2015年10月



教育の未来を考える
放射線リスクと向き合う

小高の学校 変遷と今

被災後四年半を経て、小高の教育の場は再編成されてきました。今後のために、被災前後の教育をめぐる動きを整理しました。

歴史的変遷

小 学校の制度が始まった明治初期、寺や私邸を校舎にしていました。一八七七年、金性寺境内に創立した小高小学校が現在の場所に新築されました。

その後、統廃合や移転を繰り返し、現在は小高・鳩原・金房・福浦の四校の市立小学校があります。

中 学校は、戦後に小高・金房・福浦の三校が創立し、一九七二年に小高中に統合しました。

高 校は、一九〇八年に女子裁縫学校として創立し、農業高校を経て商業高校となった県立小高商業高校と、一九六三年に創立の県立小高工業高校の二校です。

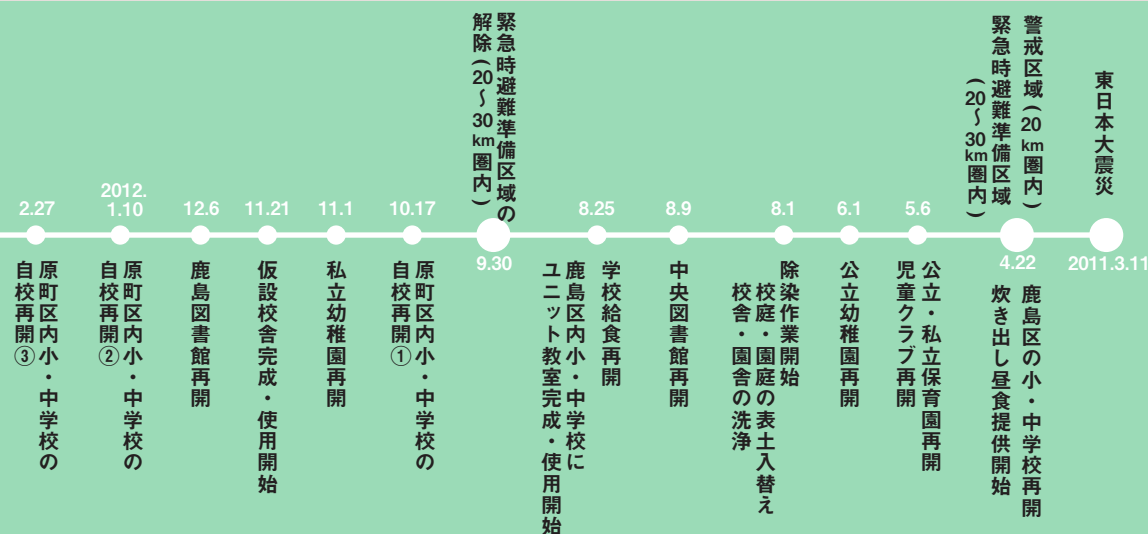
市職員との教育関係の意見交換会

八月三日（月）午後、南相馬市役所にて、教育についての意見交換会を行いました。被災とその後避難による学校教育の再編成と、その子どもや住民への影響、教育の場

避難指示解除に向けて

震災後、警戒区域となった小高区内の全小・中・高等学校は、区外で再開しています。二〇一六年四月の避難指示解除目標を見

被災後の教育施設の再開・再編の流れ



が避難生活や復興に対して果たしうる役割について、議論されました。

―新たな課題

避難生活による家族構成の変化が、保育園の待機児童の問題の一つの要因になっています。また、被災前は地域で子どもを見守る環境がありました。学校再開後の通学について、安全面を考える必要があります。

―市の対応・配慮

平成二十四年度より、学校図書館支援員の派遣が始まりました。また、各小中学校にスクールカウンセラーが配置され、子どもや親の心のケアへの対応をしています。

―教育の目指す姿

現在、新たな教育振興基本計画を策定中で、平成二十六年度策定の復興総合計画にも掲げた目標「全国トップレベルの学力」等の実現に向けた教育施策の推進を図ることとしています。

また、放射能教育に関して「正しく知って正しく怖がる」ということを強化していきたい、さらに復興という側面を考えた時に、地元貢献する人材を育てていきたい、という意見が出ました。

据えて、市教育委員会が方針を示しました。同年八月の二学期からの学校再開を目指して、備品・施設や学校運営の体制を整備しています。

鳩原・金房・福浦の各小中学校は、施設規模が最も大きい小高小学校に集約され、四校の合同運営で再開する見込みです。

小高中学校は現在の位置で再開、小高商業高校と小高工業高校は統合し、工業高校の敷地で再開する見込みです。

ただ、次ページに整理したように、学校再開をめぐる課題は依然山積しています。



▲ 当日の意見交換会の様子
市役所の学校教育課、幼児教育課、教育総務課から、四名の方にご参加いただきました。

警戒区域の見直し
避難指示解除目標

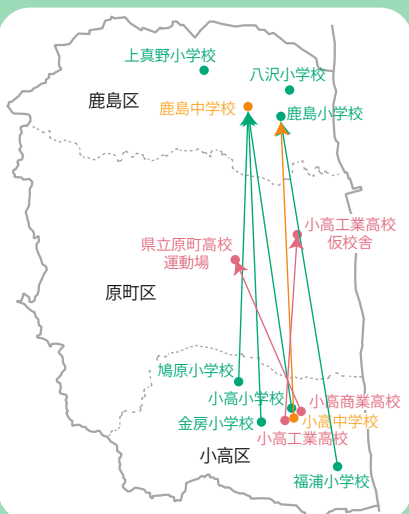
2016春

4.3
4.16
学校図書館支援員の派遣開始

旧警戒区域にある小高区内の五小中学校は、仮設校舎での授業となっています。間借りや仮設ユニット校舎等を経て、現在は鹿島区の各小中学校に仮設校舎をもち再開しています。二つの県立高校は、原町の仮設校舎で再開しています。



▶ 鹿島区の仮設校舎



▶ 小高区の小・中・高等学校の再開の流れ

新しい活動

子どもたちと大学生をつなぐ場づくり

被災直後から、人と人をつなげる活動に精力的に取り組んできた齋藤幸子さん。鹿島区に避難している小高の小中学生が、勉強も遊びもできる場づくりを始めて、今年で四年目になります。

小高区から避難しているPTAの方々と、同じ思いを共有する保護者の皆さんの協力を得て、活動を続けています。

活動への思いとその経緯

きっかけは原町を訪れた際に、この辺りに大学がなく子どもたちが大学生と関わる機会がないことに気づいたことでした。そこで、大学生にボランティアに来てもらい、子どもたちとの接点をつくろうと活動が始まりました。

仮設校舎の引っ越しもあり勉強どころではなかった子どもたちのために、夏と冬の年二回、鹿島区万葉ふれあいセンターで開催しています。活動を続けていくうちに、大学生は全国から、小学生も小高区外からも集まるようになりました。

今後に向けて

「一本の教育理念を持っていけるように、幼児からの一貫教育が大切」と子どもたちの将来にまっすぐに向き合い、実践を続ける齋藤さんのご活躍は、小高の子どもたちの将来を考えた復興の先駆けとなっています。



▶小高区小中学校児童生徒親の会について、齋藤さんへインタビュー



▶活動を続ける大学生スタッフへインタビュー

◆大学生スタッフインタビュー

・えりかさん（明治大学三年生）

…今年で五回目の参加。何度か来ているうちに、ゆくゆくはこっちで仕事がしたいと思うようになった。

・ゆうきくん（福島大学四年生）

…初期から参加。福大ボランティアセンターの代表。夢のある子たちに選択肢を増やしてあげたい。

保護者の声から 今後の教育を考える

市教育委員会が保護者を対象に実施したアンケート結果から、小高の教育をめぐる課題が浮き彫りになってきました。

◆児童・生徒数の激減

「再開後、小高区の小中学校に通学させたい」が全体の約14%、64名で、震災前よりかなり少ない人数となります。クラスでの切磋琢磨がおこりにくく、教育水準の低下を心配する声もあります。

◆放射線や原発事故への不安

原発をめぐる状況の不透明さ、子どもへの放射線リスクを心配する声があります。

◆教育をめぐる基盤の整備

鉄道、医療、商店といった生活基盤が未だ整わず、就学中や登下校中への懸念があります。

◆避難先での生活、居住地の選択

避難先での学校生活に馴染んでいる、周りの住民の動向がわからない、といった要因で小高への通学をためらう声があります。

▼様々な要因で、小高の学校への通学を望まない、望めない世帯が多い現状です。山積する課題に対処しながら、一步一步考えていく必要があります。



まちなかプラン作成中!!
 みんなの想いを集めて
 希望のプランにしましょう!

◀小高区役所、南相馬市役所、小高郵便局、あぶくま信用金庫、おだかのひるごはんなどに、冊子が置いてあります。仮設住宅集会所でのご説明も行います。ご一報いただければ、お届け、ご説明します。ぜひお手にとってご覧ください。

今後の予定

1 十一月いっぱい

小高に想いを寄せる皆様から、ご意見をいただき、まちなかプラン案に反映させていただきます。

2 その後

小高区地域協議会から南相馬市役所に「まちなかプラン」を提案し、今後の行政計画に生かしてもらいます。

小高地域構想ワーキンググループ (小高区地域協議会)

東京大学 工学部都市工学科 地域デザイン研究室

郵送・〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1

電話・03-5841-1845

ファックス・03-5841-6265

メール・odaka@td.t.u-tokyo.ac.jp

南相馬市小高区地域振興課

郵送・福島県南相馬市小高区本町2丁目78番地

電話・0244-44-6716

ファックス・0244-44-6047

メール・murai-hiroyuki@city.minamisoma.lg.jp

「放射線コラボ講演」

第二回小高地域構想ワーキンググループ

これからの小高での生活を想像すると、放射線の影響について、心配なことがたくさん出てきます。

そこで、八月二日(日)午後、浮舟文化会館にて、専門家と膝を突き合わせて議事できる場を用意しました。約三十名程の方が参加し、様々な質疑がありました。



講演要旨

河田昌東さん(NPO法人チェルノブイリ救援・中部)から「小高での暮らし」と題し、調査データが提示されました。

小高では年間1mSv以下の地表部分が、二〇一二年の21.8%から二〇一五年には6.1%に増加している一方、山では事故直後に汚染した木の葉が腐葉土になるなど、汚染が循環していることや、野菜も全体的には汚染が下がっているが種類により異なることなどが、明らかになっています。

木村真三さん(獨協医科大学)からは「住むべきか、住まざるべきか」と題し、いわき市志田名地区での取り組みが紹介されました。

二本松市のアドバイザーも務めている経験もふまえ、自分で住むところの線量を測りながら、住むか住まないかという選択をするべきである、とのお話がありました。

質疑要旨

質問・薪を使うときの注意点は？

↓チェルノブイリでも薪ストーブや薪風呂などを利用していたが、内部被曝の原因になっていた。薪風呂の煙からも飛散する。

震災前の薪でも付着している可能性があり、測定の必要がある。

質問・安全の基準は？

↓河田：年間5mSv以下、目標は1mSv。木村：緊急時5mSv以下、

四年経た今は通常の2mSv以下。

そのほか、樹種によって汚染が違いう、イカやタコはセシウムを体内に取り入れれない等の知見を得ました。

今回の企画も大変好評でしたが、事後アンケートからは、「帰還を決めた者がどうすれば良いのか、具体的な話をもっと聞きたい」という声も聞かれました。

そこで、今回とは異なる意見の専門家を招いて第二弾も企画したいと考えています。その際には、ぜひ、お気軽にご参加ください。



震災後に設立された、放射能測定センター・南相馬、通称「とどけ鳥」で活動されている河田昌東さんより寄稿をいただきました。

とどけ鳥の設立

東日本大震災とそれに伴う福島原発事故から四年半が経ちました。

私たちは二〇一二年六月に原町区錦町に「放射能測定センター・南相馬（通称：とどけ鳥）」を設立し、住民の方々が持参する野菜や土壌・井戸水などの放射能測定を無償で行ってきまし

た。測定員は、チェルノブイリ救援・中部スタッフ一名の他は全員、南相馬市民のボランティアさんです。

放射能についてわかってきたこと

これまで一万件近い検体を測定し、様々なことが分かってきました。

例えばセシウムの汚染は野菜

によって大きく異なります。土壌中に深く根を張る人参や牛蒡、大根の他、ネギの仲間は汚染が低く、地表に細かい根を張る紫蘇や小松菜、ホウレン草等は汚染が高い傾向があります。

また、時間経過とともに放射能汚染が低下しつつあります。

二〇一四年度には検出限界（約10 Bq/kg）を超えたものは5.6%しかありませんでした。もちろん、国の基準（100 Bq/kg）を超えたものは一件もありません。

逆に、キノコや山菜はまだまだ汚染が高く食べられません。

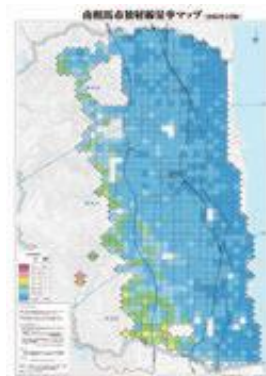
近日中、ブックレット発行

こうして測定により得られたデータをまとめ、十月下旬にはブックレット（八〇頁）を発行し、南相馬市民の皆さんに自ら内部被曝を防ぐ手立てにして頂きたいと願っています。

▼ブックレットは、「放射能測定センター・南相馬」で手に入ります。



河田 昌東（かわたまさはる）
分子生物学者。
NPO 法人チェルノブイリ救援・中部の理事を務める。
1990年からチェルノブイリ事故被災者への支援活動に取り組む。2011年より、被災地南相馬の支援を続けている。



▶全国のボランティアと南相馬市民のチームで測定し作成している、空間線量マップ



小高中学校にて

ワーキンググループで何をやるのか、
アイデア大募集中です！
どなたも大歓迎です。
ぜひ、ご参加ください。

小高地域構想ワーキンググループ (小高区地域協議会)

小高区地域協議会の提案を受けて設置されました。住民を中心に小高の復興に関心を持つ人々が集まり活動しています。

十月三十日(土) 上浦にて
七月上旬と十月上旬に開催した、まちなかでの「小高あるき」に続き、第三弾を上浦で行います。在における小高の歴史や魅力を、一緒に再発見しませんか？

ワーキンググループの 予定

復興拠点施設連続ワークショップに行こう！

- 第一回 十一月一日(日) 十三時から 浮舟文化会館
- 第二回 十一月十五日(日) 十三時から 浮舟文化会館
- 第三回 十一月十九日(木) 十九時から 原町生涯学習センター
- 第四回 十一月十三日(日) 十三時から 浮舟文化会館

まちなかで計画されている復興拠点施設について、南相馬市が、全四回の連続ワークショップを開催します。予約不要ですが、小高にとってより良いものにしていくために、みんなで話し合いに行きましょう。

東京大学 工学部都市工学科 地域デザイン研究室
03-5841-1845 odaka@td.t.u-tokyo.ac.jp
南相馬市小高区地域振興課
0244-44-6716

協力：仲光寛城(ナカミツデザイン)